

Title	福岡市方言の音調変異について
Author(s)	太田, 一郎; 二階堂, 整; 高野, 照司
Citation	鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集=Cultural science reports of Kagoshima University, 70: 29-40
Issue Date	2009-07
URL	http://hdl.handle.net/10232/8577

福岡市方言の音調変異について

太田一郎・二階堂整¹・高野照司²

1. はじめに

この論文では、福岡市を中心とする地域方言（以下福岡市方言と呼ぶ）に見られる句音調の変異性（variability）を考察する。考察の対象は、複数の音韻語（中核の語と助詞や屈折語尾などを含む）にわたって見られる平板な音調である。この音調は、句内の有核アクセント語の下降音調を消し、複数の音韻語から成る単一の新しい音調句を成立させる。この音調特徴は、これまでも早田（1985）や久保（2001）などにおいて議論されており、疑問詞（「何」「どこ」等）や形式名詞「と」との共起が指摘されている。しかしながら、これらが音調の変異とどのように関わるのかについては議論されていない。

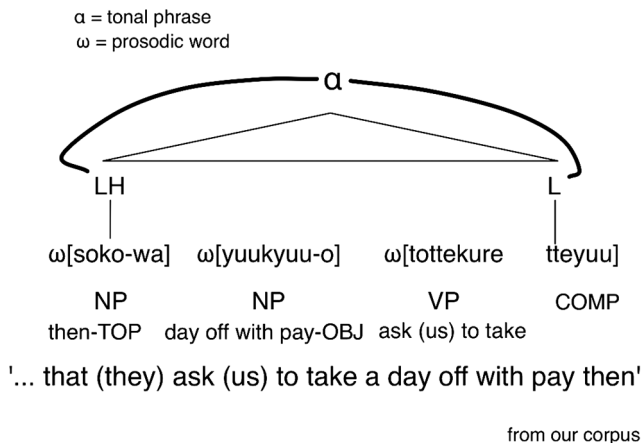


図 1. 疑問詞，形式名詞なしの平板音調

¹ 福岡女学院大学教授

² 北星学園大学教授

一方、木部（2007）、岡野（1983）などにおいては、この平板な音調は図 1 に示すように疑問詞や形式名詞がない場合にも生じることが述べられている。この音調の平板化は、ひとつの句音調の型が二つ以上の音韻語に拡張される tone spanning と呼ばれる現象と考えられる。tone spanning は音調境界を消し、複数の音調単位をより大きな単位にまとめていく dephrasing と呼ばれる韻律上の過程により生じる（cf. Igarashi 2007）。平板な音調を生じさせるこの過程は、いくつかの言語内的小および言語外的要因により条件付けられているのではないかと予想される。

本稿では、福岡市方言の音調が可変的であること、およびその変異に関わる要因を探るために行った予備的調査の結果を示す。音調に関する現象は、ピッチの動きに密接に関わるという点では本来音声学の現象であるが、本稿においては詳細な音声学的分析は行わない。ここで提示するのは、ピッチの上下の動きをカテゴリカルに判断した著者の聴覚分析による結果のみである。そのため、考察は文法、談話、社会のそれぞれの要因と平板音調の出現に関するものだけに限っている。本稿の結びとして、この音調変異が相互行為的理由による言語変化を示唆するものである可能性を述べる。

2. 福岡市方言の社会言語学的状況

福岡市周辺は日本の主要大都市圏のひとつであり、九州の政治、経済、文化の中心でもある。現在の人口は 140 万人を超え、さらに増えつつある。この地域では、周辺地域、または国内の他の地域からの人口流入に伴い、方言接触が盛んであったと考えられる。しかしながら、標準変種または東京方言の影響が強かったと予想されるにもかかわらず、方言特徴は比較的よく保存されており、若年層話者もアイデンティティを示すものとして使用しているようである。これは自らの方言に対し、ポジティブな評価をしているところからも伺える（cf. 陣内 1996）。福岡市方言についてはこれまで多くの研究がなされているが、ほとんどは語レベルの音韻、語彙、文法に関するものであり、韻律に関するものは比較的少ない。

3. 音調変異の分析

3.1 目的

福岡市方言の音調変異は dephrasing の問題であり、求められるのは dephrasing が生じる言語内的、言語外的制約を特定することである。この目的のために、tone spanning の二種類の事例を分析した。ひとつは疑問詞のある句での dephrasing, もうひとつは疑問詞のない句での dephrasing である。これらに加えて、音韻語での平板な語アクセントの生起を調べた。

3.2 音調変異への制約条件

本稿で考察するのは以下の3つの要因群である。

(1) 言語内的要因（文法的要因）

- ・ 音調句主要部の語彙的または文法的カテゴリー：NP, VP, AP, 疑問詞など
- ・ 文法的形式：アスペクト形式, 格助詞, 補文標識
- ・ 文の種類：平叙文または疑問文
- ・ 制限的修飾（属格を含む）

(2) 社会的要因

- ・ 話者の世代：若年, 中年

(3) 談話的要因

- ・ 発話の到達点：誰に向けた発話か（話し相手かそれ以外か）

3.3 データと話者

本稿で分析したコーパスは、それぞれ約1時間のふたつ自然談話から成る。ひとつは2人の大学生, もうひとつは中年の大学職員同士の会話である。両方とも親しい間柄の女性同士である。個人話者の詳細は表1に示す。会話はそれぞれの話者に1台のMDレコーダを使ってデジタル録音した。録音はどちらも著者のひとりの研究室で行った。

	Conversation 1 Between young speakers Recorded in August 2003	Conversation 2 Between middle age speakers Recorded in February 2004
Speaker A	Gender: female, Age: 21 Born and raised in Fukuoka city	Gender: female, Age: 49 Born and raised in Fukuoka city
Speaker B	Gender: female, Age: 21 Raised in Fukuoka city from 6 to 16, moved to a neighbouring town	Gender: female, Age: 51 Born and raised in Fukuoka city

表 1. 録音と話者の情報

3.4 多変量解析

この音調変異現象は言語変異理論の枠組みでの分析に適しているので、言語変異分析用統計プログラムの Goldvarb X を用いて、3つの多変量解析を行った (Bailey and Preston 1996, Paolillo 2002, Tagliamonte 2006, 松田 2006)。以下の表でその結果を示す。

3.4.1 分析1：疑問詞を含む音調句の tone spanning

トークン数は114。今回のデータ中で疑問詞を含む音調句すべてである。平板な音調が生じる領域は普通は疑問詞を伴う音調句だが、他に発話全体が平板になる場合もある。音調の境界には通常ピッチの急激な下降や下降上昇などのかなり明瞭な動きが見られる。ただし、疑問詞を含む句は、他の2つの分析とは別に行わねばならなかった。というのは、いくつかの要因で、いわゆる knock-out が生じたためである。³

分析のための音調句の区切りは基本的に聴覚により判断したが、十分に信頼できない場合は Praat5.0 でピッチを分析して確認した。音量不足などのため音声の質が十分でなく、Praat で分析できなかった場合はトークンから除

³ クロス表のセルに '0' が生じることを表わす。この場合、「バリエーションがない」ことを意味し、Goldvarb での処理ができなくなる。

外した。予想された制約要因と統計分析の結果は表2のとおり。Goldvarb X による分析では、要因の重みが .50 を上回る場合、その要因は目標となる変異形（この場合は平板な音調）の生起を促進し、下回る場合はその逆と判断される。統計分析によると、格マーカの存在 (0.15), 制限的修飾 (0.16), 話者の世代 (0.19) は tone spanning の抑制要因として働くことがわかる。また, (4) の utterance orientation も関与する要因であり、発話が話し相手に向けられた場合 (0.64) は tone spanning が促進され、そうでない場合 (0.28) は抑制されると考えられる。形式名詞の「と」は、他の要因との交互作用が見られるため、この分析では要因に含めていない。

Tokens: 114	Input: 0.904		weight	%	N
(1) phrase final forms		presence	[.57]	89.3	50
complementaizer (-ka, -kaina, -mo, -tokorode)		absence	[.47]	80.7	46
quotative 'to' (not the formal noun)		range	0.10		
copula (tentative form): -yaroo					
(2) case markers 'ga', 'ni', 'o', etc.		presence	0.15	62.5	10
Ex. Doko ni modoruu		absence	0.57	88.7	86
'Where shall we go back?'		range	0.42		
(3) restrictive modification		presence	0.16	60	6
Ex. Nan no hanashi suru (genitive)		absence	0.57	87.4	90
'What story are we going to talk about?'		range	0.41		
(4) utterance orientation		yes	0.64	85.7	60
'yes' : utterance is oriented to addressee		no	0.28	83.7	36
'no' : utterance is clearly not oriented to addressee		range	0.36		
(5) generation (young, middle age)		young	0.63	90.4	75
		middle age	0.19	70	21
		range	0.44		

Total Chi-square = 12.0956 Chi-square/cell = 0.6366 Log likelihood = -37.384
Significance = 0.049

表2. 疑問詞付き音調句の tone spanning に関する多変量解析の結果

3.4.2 分析2：通常句（疑問詞を含まない）における tone spanning

両方の会話の書き起こし部分の冒頭6分を分析した。トークン数は407。疑問詞を含む句は除外している。表3の結果が示すとおり、形式名詞「と」の重みは0.94でもっとも強力な要因として働くことがわかる。発話の方向と話者の世代はここでも変異に影響を与える要因である。その他の要因は統計的に有意ではなかった。

Tokens: 407	Input: 0.139	weight	%	N	
(1) aspectual forms (presence, absence)	presence	[.40]	17.4	8	
	absence	[.51]	16.8	60	
	range	0.11			
(2) formal noun 'to' (presence, absence)	presence	0.94	13.2	50	
	absence	0.46	75	18	
	range	0.48			
(3) sentence type (declarative, interrogative)	declarative	[.49]	25	14	
	interrogative	[.50]	15.6	54	
	range	0.01			
(4) syntactic categories (NP, VP, AP, others)	VP	[.58]	21.8	36	
	AP	[.54]	16.9	12	
	others	[.42]	13	7	
	range	0.16			
(5) utterance orientation	yes	0.57	20	62	
	'yes' : utterance is oriented to addressee	no	0.28	6.5	6
	'no' : utterance is clearly not oriented to addressee	range	0.29		
(6) generation (young, middle age)	young	0.41	15.8	32	
	middle age	0.59	18	36	
	range	0.18			

Total Chi-square = 35.1284 Chi-square/cell = 0.7318 Log likelihood = -153.820

Significance = 0.048

表 3. 疑問詞なしの音調句の多変量解析の結果

3.4.3 分析3：音韻語における平板音調の生起

上のふたつの分析は tone spanning の生起に関わるものだった。この分析3では、語の音調が平板になるかどうかを見た。トークン数は396、書き起こし冒頭から3分半を分析した。変異が生じる領域はこの場合は音韻語の語彙的音調である。

この分析はどのような要因が語アクセントレベルで平板な音調が生じることに関与するかを見るために行った。平板音調は平板な音調をもつ音韻語の連続により形成される。伝統的な福岡市方言は、平板な語彙アクセントをもたないということが、これまでしばしば指摘されてきたが、木部（2007）や陣内（1996）は、平板句音調には動詞句（VP）が関与していると示唆しており、音韻語のレベルで、ある言語的要因が平板な句音調の形成に関与するのではないかと予想される。それゆえ、どのような要因が語レベルの音調形成に寄与するのかを考察する価値はあると思われる。

Tokens: 396 Input: 0.596		weight	%	N
(1) similarity to the tone of Tj (accented, unaccented) accented = with a pitch fall unaccented = flat	accented	0.71	74.7	121
	unaccented	0.35	44.9	105
	range	0.36		
(2) aspectual forms (presence, absence)	presence	0.78	86.5	32
	absence	0.47	54	149
	range	0.31		
(3) syntactic categories (NP, VP, AP, others)	VP	0.67	74.5	108
	others	0.51	54.8	17
	AP	0.44	51.2	21
	NP	0.37	44.7	80
	range	0.3		
(4) utterance orientation	yes	0.54	58.8	200
	'yes' : utterance is oriented to addressee	no	0.28	46.4
	'no' : utterance is clearly not oriented to addressee	range	0.26	26
(5) generation (young, middle age)	young	[.44]	55.9	109
	middle age	[.56]	58.2	117
	range	0.12		
Total Chi-square = 33.5783 Chi-square/cell = 0.9594 Log likelihood = -228.387				
Significance = 0.007				

表 4. 語アクセントの平板化生起の結果に関する多変量解析の結果

表 4 の結果から、3 つの言語的要因（標準変種または東京方言との音調の類似性、アスペクト形式、統語カテゴリー）が統計的に有意であり、これらの存在が平板な音調の生起に影響を与えることがわかる。そしてこれが tone spanning が生じる音声的条件になっていることが予想される。加えて (4) の発話の方向性（これも有意）は平板音調の抑制要因となっているようである。話者の世代は影響がある要因ではないようだ。

3.5 3つの結果のまとめ

これらの結果は、福岡市方言の音調の変異性に関する先行研究の主張を確認した。すなわち、疑問詞、形式名詞「と」、アスペクト形式、統語カテゴリー、などが変異に関わると考えられる。また、社会的、談話的要因も関与している可能性がある。これらの要因が存在する場合は、tone spanningが生じる可能性が高くなる。

さらに、別の推測も可能である。分析1と2では世代差が見られたが、このことは福岡市方言の音調で言語変化が生じている可能性を示唆するものと思われる。

Generation & chi-square test				Accent types in Tokyo Japanese		
				Accented	Flat	Sum
Middle age Chi square 4.716 df. = 1 p. <.030	Realised accent in data	Accented	frequency	58	26	84
			%	69.0%	31.0%	100%
		Flat	frequency	63	54	117
			%	53.8%	46.2%	100%
		Sum	frequency	121	80	201
			%	60.2%	39.8%	100%
Young Chi square 38.237 df. = 1 p. <.000	Realised accent in data	Accented	frequency	71	15	86
			%	82.6%	17.4%	100%
		Flat	frequency	42	67	109
			%	38.5%	61.5%	100%
		Sum	frequency	113	82	195
			%	57.9%	42.1%	100%

表5. 分析3におけるアクセント型の分布 . (N = 396)

4. 音調の相互行為的使用と言語変化

福岡市方言の音調変異が言語変化を示すと考えられる点はふたつある。ひとつは東京方言的（あるいは標準変種的）語アクセントの増加である。上記のように、伝統的福岡市方言は平板型の語アクセントを持たないと言われている。しかしながら、表5に示すように、若年層話者の語アクセントの分布はむしろ東京方言のそれに似ており、 χ^2 二乗検定による統計的有意差（ $p < .000$ ）も確認できる。一方中年層話者は、統計的有意差（ $p < .03$ ）はみられるものの、東京方言の平板語を起伏式で発話する（またその逆）の傾向もある。これらの結果から、東京的アクセントのシステムティックな使用（東京語と同様の使用）が若年層の間で広がっていると推測される。

さらに興味深いのは、疑問詞を含む音調句に対する分析1と疑問詞を含まない音調句の分析2の結果の間に見られる不一致である。分析1の理論モデルでは、統計分析の結果から、「若年」が平板な句音調の促進要因で「中年」が抑制要因であると言えるが、分析2の結果からはその逆で、「中年」が促進要因、「若年」が抑制要因となる。なぜこのような不一致が見られるのだろうか？

Chi square 8.684949 df. = 1 p. <.003			Generation		
			Middle	Young	Sum
Tone spanning	No	frequency	10	8	18
		%	55.6%	44.4%	100%
	Yes	frequency	21	75	96
		%	21.9%	78.1%	100%
	Sum	frequency	31	83	114
		%	27.2%	72.8%	100%

表 6. 分析1における話者の世代と tone spanning の相関

Chi square df. = 1		0.10 n.s.	Generation		
			Middle	Young	Sum
Tone spanning	No	frequency	88	86	147
		%	50.6%	49.4%	100%
	Yes	frequency	119	114	233
		%	51.1%	48.9%	100%
	Sum	frequency	31	83	407
		%	27.2%	72.8%	100%

表 7. 分析 2 における話者の世代と tone spanning の相関

これは、平板音調が徐々に特定の相互行為的機能を獲得しつつあることによるのではないかと考えられる。別の言い方をすれば、この音調は中高年世代の自然な発話では特に相互行為の意味をもたず、また不規則な現れ方をすること、他方若年層では相互行為的デバイスとして機能し、話し相手に発話が向けられていることを表し、そのことが話し相手の談話への関与を強化するものであると言える。表 6 はその証左のひとつである。話者の世代と tone spanning の相関関係は χ^2 二乗検定で統計的にも確認でき ($p < .003$)、若年層ほど疑問詞を含む音調句で、つまりより相互行為的である場合に tone spanning が多いことがわかる。分析 2 のように相互行為性が低い場合には、 χ^2 二乗検定の結果は有意ではない (表 7 参照)。

これらふたつの事実を見ると、語彙アクセントの変化が進行する中、話者たちは平板音調という方言特徴を依然として保っているが、その機能は相互行為的デバイスへと推移していると言えるのではないだろうか。これまで日本語の音調の言語変化を相互行為的視点から論じた研究は、著者たちが知る限りではなく、今後さらに詳細な研究が求められる。

参考文献

- Bailey, R. and D. R. Preston. 1996. *Second Language Acquisition and Linguistic Variation*. John Benjamin: Amsterdam.
- 早田輝弘. 1985. 『博多方言のアクセントと形態論』 九州大学出版会.
- Igarashi, Yosuke. 2007. Typology of Prosodic Phrasing in Japanese dialects. Workshop on "Intonational Phonology: Understudied or Fieldwork Languages", ICPHS 2007 Satellite Meeting at Saarland University, Saarbrücken, Germany.
- 木部暢子. 2007. 「福岡市アクセントの平板化」, 『国文学：解釈と鑑賞』 至文堂.
- 陣内正敬. 1996. 『北部九州における方言新語研究』 九州大学出版会.
- 久保智之. 2001. 「福岡方言における統語論と音韻論の境界領域」 『音声研究』 Vol. 5 No. 3, 27-32, 日本音声学会.
- 松田謙次郎. 2006. 「VARBRUL プログラムとは何か」 *TALKS*, No. 9, 31-56. 神戸松蔭女子学院大学.
- 岡野信子. 1983. 「福岡県の方言」 飯農毅一ほか (編) 『講座方言学：九州地方の方言』, 57-86. 国書刊行会.
- Paolillo, C. J. 2002. *Analyzing Linguistic Variation: Statistical Models and Methods*. CALI.
- Tagliamonte, Sali. 2006. *Analysing Sociolinguistic Variation*. CUP.